

Tuer, Andrew W.

**Old London street cries and the cries of to-day ; with heaps of quaint cuts including hand-coloured frontispiece.**

London, The Leadenhall press, 1885. (文献番号 5-21)

Hiler p. 854

チュア著

ロンドン街頭の古今の呼び売り；手彩色口絵図版と多くの古風な版画付き

18×10cmの小型本で、表紙を開くと口絵に花売り娘の手彩色図版(図参照)がある。頭上に花籠をのせ、大きな口を開けて叫んでおり、図版の下に〈呼び声〉が記されている。このように本書は、呼売りの図とその呼び声、更にその呼売りを題材にした詩と解説を一つの単位として構成してある。小鳥屋、インク屋、牡蠣<sup>かき</sup>売り、ミルク売り、さくらんぼ売り、野菜売り、卵売り、人形屋、古着屋、おもちゃ売り……など市民生活にかかわりの深い呼売り、およそ50種が登場する。口絵以外の図版は白黒であるが、風刺を混えた図や解説は単に呼売りの服装ばかりでなく、市民生活そのものの記録として興味深い。

〈呼売りの声〉は詩や子供の本の題材として取り上げられており、古くは15世紀中ごろ、リドゲイト(John Lydgate)作「ロンドンの文なし」(London lyckpenny)と題した美しいバラードの中でもうたわれている。末尾には挿図の出典・解説がなされている。〈鑄掛屋〉〈ラヴェンダー売り〉など10枚の図版は風刺画の名匠ローランドソン(T. Rowlandson)によるもので、1820年に出版された「下層の人物写生」(Characteristic sketches of lower order)から抽出している。



また、〈椅子修理屋〉などの図版は今日では珍本といわれているハリス(J. Harris)作の子供の本「日々みられるロンドンの呼売り」(The cries of London as they are daily practised, 1804)からのものもある。この種の主題の本は一つの伝統もっていて類書も多いが、本館では初期に属するボス(A. Bosse)著“Les cris de Paris”1640年(文献番号5-15)やヴェルネ(C. Vernet)著“Cris de Paris”(文献番号5-18)がある。図は、クローホール(J. Crawhall)の作品で、わずか2ペニーで売られた「移動市場；よい子たちの楽しみとしてのロンドンの呼売り」(The moving market ; cries of London, for the amusement of good children) 1815年J. Lumsden and Son社からのもの。